

Title	長崎版日本文典と天草版拉丁文典
Sub Title	A "Japanese grammar" printed at Nagasaki and a "Latin grammar" printed at Amakusa
Author	土井, 忠生(Doi, Tadao)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.2 (1933. 5) ,p.71(243)- 106(278)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330500-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

長崎版日本文典と天草版拉丁文典

土 井 忠 生

I

葡萄牙人耶穌會士バー・デ・シヨアン・ロドリーゲスの編述に係る日本文典三巻 (*Arte da lingoa de Japam com posta pelo Padre João Rodriguez Portugues da Cōpanha de IESV diuidida em tres livros.*) が長崎の日本耶穌會學林で印刷に附せられたのは一六〇四年（慶長）であつて、三巻全部の刊行を終了したのは、それから四年後の一六〇八年（慶長十三年）であつた。これより早く耶穌會士の手になつた日本文典は、一五六三年（永祿六年）肥後の高瀬に病没して、日本に渡來した耶穌會士中最初の落命者となつたイルマン・ドルテ・ダ・シリワ (*Duarte da Silva*) の著を魁として、一二に止まらなかつたやうである。一五六四年（永祿七年）に肥前の度島で布教に従つてゐたイルマン・シヨアン・フェルナンデス (*João Fernandez*) とバー・デ・ル

イス・フロイス (Luis Frois) とが協同して編纂し、爾後フロイスが二十年間筆を加へたもの、一五八一年（天正九年）に府内の學林で完成したものなどは同系統に屬するかとも想はれるが、ロドリーグス以前既に四十年間にわたつて、日本文典の編修には幾多の苦心經營が重ねられて來たのである。

ロドリーグスが長老の命を奉じて日本文典を著すに際して、かゝる先輩の研究既存の文典から恩恵を享けた所は實に尠くなかつた。「わがバーデン達の早く作り、寫本によつて行はれてゐた」いくつかの註解 (*algumas annotações*) が、言語文字に達した日本人の教示と共に、ロドリーグスの文典に裨益を與へた事は、彼自ら記してゐる所である。⁽²⁾ 然しロドリーグス前の日本文典は一部も今日に傳はつたものがないので、如何なる點に於て如何なる程度に直接の影響を及ぼしてゐるものか、明瞭にし難い。たゞ一五九四年（文祿三年）に天草學林で印刷したペーデン・マヌエル・アルヴァーレス (Manoel Alvarez) の拉丁文典が、拉丁文法を説明したものではあるけれども、その一部分に加へてある日本語法に關する註記を通じて、ロドリーグスの日本文典がそれ以前の文典に負ふ所の一斑を推測し得るのみである。本稿は即ちその關係に就いて考察を加へんとするものである。

〔註〕

(1) 精神科學(廣島文理大)昭和八年第一卷所載拙稿「吉利支丹と日本語」の四、日本語の文典及び辭書の編纂(一一〇頁以下)

(2) *Arte da lingoa de Japam. Proemio.* (緒言) iii.

バードレ・ルイス・フロイスが、初めイルマン・ジョアン・フェルナンデスの力を借りて、日本語の文典を作る迄、日本には拉丁文典の組織に則つた文典が出来てゐなかつたが爲に、日本語を學ぶのに多大の損失を蒙つてゐたと、一五六四年十月三日附平戸港で認めたフロイスの書翰には書いてゐる。⁽¹⁾故に、主として活用と文章法とを取扱つた彼等の日本文典は、拉丁文典に取つた範疇を適用したものに過ぎなかつたであらう。フロイスはシルヴの逝つた一五六三年の秋に來朝したのであつて、シルヴが既に日本文典を著してゐたことを知らなかつたものか、或は知つても殊更言及することを避けたものか、速断し難いけれども、シルヴの文典をば見なかつたのであらう。更に想像すれば、シルヴの文典は、シルヴの臨終に會しその遺著に文典辭書のあつた事を傳へてゐるイルマン・ルイス・ダルメイダ(Luis d'Almeida)⁽²⁾の外には殆ど知られなかつたものであらう。日本に在住せるものや印度から來朝するものに廣く利用せられた事は、他に類がないやうにさへ、後の布教史等に書いてゐるのは、事實に基づいた言葉とも思はれない。何れにしてもその文典も拉丁文典の型を出なかつたに相違ない。

ロドリーゲスの日本文典は、其の最後に出で、能く日本語の特質を洞察し獨創卓見に富んだものではあるが、而も尙當時通行の拉丁文典の羈絆を未だ脱してゐないのである。

中世に多く用ゐられた拉丁文典に二種あり、一は葡萄牙人マヌエル・アルヴァーレスの

De Institutione Grammatica.

であり、一は西班牙人アントニオ・デ・ネブリハ (*Antonio de Nebrija*) の

Introductiones in Latinam Grammaticen.

である。ロドリーゲスが右二本中主としてアルヴーレスのに據つてゐる事は、一見して疑ふ餘地のない程に明白である。全篇を三巻に分つたのを初として、アルヴーレス拉丁文典の影響をば全般に深く強く受けてゐる。殊に最初の第一巻に於て最も密であり、第二巻第三巻と後に進むに従つて次第に疏になつてゐる。第一巻で、先づ名詞代名詞の轉尾・動詞の活用を示し、入門篇に入つて品詞の分類とその形態を説いた順序方法はアルヴーレスその儘である。活用はたゞ拉丁語の形式にあてはめたに過ぎない。品詞は之を十品詞に分ち、拉丁文法の八品詞の外に助辭と格辭とを加へてゐる。當時日本に於ては「名」と「詞」と「てにをは」とに分けてゐたので、その「てにをは」に相當するものとして二品詞を特に立てたのである。助辭中名詞の格を示すものを *Artigo* と呼んでゐるのであつて、假に格辭と譯して見た。その外の八品詞はアルヴーレスの文典に名詞・代名詞・動詞・分詞・前置詞・副詞・感動詞・接續詞としてゐる中の前置詞を後置詞と改めただけである。第二巻文章篇で、普通文に於ける語の運用・文の構成を説き、次に修辭に移る所も彼に一致してゐる。その終に發音・綴字より漢詩・和歌・小歌・連歌の韻文を略述し、第三巻に移つて、内典・外典の文體、書札・誓紙・願書・訴狀・折紙等各種の文書に就いて敍したのは、アルヴーレ

スラ丁文典に綴字・韻文・散文を第三巻に取扱つてゐるのに學んで次第したものである。更に幼名・假名・唐名・官名・受領名・實名・剃髪者名・姓氏等の人名を述べ、次に數詞とその用法構成、九々など複合する場合に起る語形變化、度量衡に關する數へ方、名數一般、時刻・日・月・年等時間に關する數へ方等、計數に關して詳説し、年號表・皇帝年代記その他内外の年表迄掲げてゐる點に至つては、日本語學習の手引書として獨自の面目を發揮したものであつて、必ずしも拉丁文典の組織に倣つてゐるとは言へない。今日の文典に比すれば、その範圍を超えて、日本語に關する百般の説明を含んだものであるが、すべて當時の文典は今日の文典とは異なり、嚴密なる意味の語法のみを對象としたものではなかつたのである。

〔註〕

- (1) *Cartas do Japão.* (Evora 1598) I. f. 146 v.
- (2) 一五六四年十月十四日附豊後發書箇。*Cartas do Japão.* (Evora 1598) I. f. 156 v.
- (3) Luis de Guzman: *Historia de las Misiones.* (Alcalá 1601) I. p. 533. Jean Crassot: *Histoire de l'Eglise du Japon.* (Paris 1715) I. p. 266. 太政官譯日本西教史上二二八頁

三

マヌエル・アルヴーレスは一五二六年(大永六年)に葡國マデラ島に生れ、二十歳の頃耶蘇會に入り、後コイント・プラ・エヴォラ・リスボアの學林長に歴任し、一五八二年(天正十年)十二月三十日にエヴォラの學林で沒し

一五九四年九月十六日附バーデン・フランシスコ・ペシオ (Francisco Passio) の手紙にも、

葡萄牙語及び日本語の添へられたバーデン・マヌエル・アルヴェレスの文典が今印刷せられた。(Agora se imprimindo a Arte de Gram. do p. m. Aluz cõ a linguagẽ portugueza E Japonica)

と言ひ、その時印刷に取掛つた拉葡日對譯辭書と共に「日本人が拉丁語を、歐羅巴の我々が日本語を學ぶ爲のもの」⁽¹⁾であると書いてゐる。

かゝる形態の拉丁文典は既に早くから存したものゝやうである。バーデン・ガスバル・コエリョ (Gaspar Coelho) が一五八一年(天正九年)の日本布教狀況に就いて報告した一五八二年二月十五日附年報には、有馬セザナリオの日本人生徒が拉丁語の修得に好成績を擧げてゐる事を述べて、

一日の一部を割いて、日本語を読み書きし、一部を費して、拉丁語を読み書かし、又拉丁文典を彼等の才能に應じて學んでゐる (estudar a Grãmatica Latina conforme a suas capacidades)。かくて、拉丁語は彼等にとつて甚だ難解なものであるにも係らず、かゝる方法を以て理解を助けてやり、生徒も熱心に學習するので、我々の生徒が費すのと同じ期間或は更に短い期間を以て、立派な拉丁語を操るに至るであらう。⁽²⁾

とある。又、一五八二年(天正十一年)に伊東鈍滿所等の青年遣歐使節を伴つて日本を去つたワリニャーノが、コーチンにおいて、日本副管區内の事業概要を西班牙文で綴り、一五八三年十月二十八日附で耶蘇會總

長に報告してゐるが、その中に、セミナリオに於ける日本人生徒の拉丁語學習振を記してゐる條は、前引コエリヨの文面とよく似てゐる。さうして「日本語にて説明したる」(declarada en Japon) 拉丁文典が辭書等と相待つて拉丁語學習に大いに資する所があると述べてゐる。⁽³⁾

更に又、一五八五年(天正十三年)十月一日附バーデレ・ルイス・フロイスの年報有馬セミナリオの條に、當時在學中の三十三人の生徒が日本及び拉丁の文字學習上に著しい進歩を示したのは、その年拉丁語を日本語で講義したからであるとし、拉丁文典・拉日辭書・日葡辭書の編修にも言及してゐる。

彼等(セミナリ)の爲に(拉丁)文典のプリンシピオを日本語で説明して、文典を彼等の言葉に適應せしめた。(Acomodou se a arte de grāmatica a sua Lingoa, declarando Ihes os principios della em Japão) 又拉日辭書を編纂中である。我々のでは役に立たないからである。日葡辭書も亦完成した。それは日本に來つた者によつて著された辭書の中で最も豊富にして完全なものである。⁽⁴⁾

これらの報告は、その言葉こそ異なれ、大體同じやうな事を述べてゐるであらう。そこで次のやうに推定を下し得るかと思ふ。即ち、一五八一年(天正九年)に巡察師父アレッシャンドロ・ワリニヤーノによつて日本耶蘇會の教育機關が確立し、府内にコレヂオ、有馬にセミナリオ等が設けられるに及んで、耶蘇會の語學研究は一大進展を遂げ、語學書編纂上にも一時期を劃するに到り、有馬セミナリオにおいては、日本人生徒の學習を容易にする爲に拉丁語を日本語で講じ、日本語で註解を施した拉丁文典も作られたも

のやうである。尤も、日本文典と同様に、この時始めてかかる拉丁文典が現れたとは断定出来ない。

その基礎となるべきものがあつたのによつて、此の機會に集成増補せられたのかも知れない。何れにしても、天正十年前後に、日本人向きに手を加へられた拉丁文典が出来てゐたことには疑ひなからう。さうして、その拉丁文典は恐らくはアルヅーレスのを用ゐたのであつて、文祿三年天草版本も源に溯ればそこ迄辿り得るのであらう。日本語の説明を加へた部分も、すべて天草版本の範囲を出なかつたのではなからうか。フロイスの年報にも *os principios* を註したものであると言つてゐる。アルヅーレス拉丁文典は品詞論に入る前に、先づ名詞動詞の變化を示し、天草版本もその部分にのみ日本語の註記を見るのである。それが即ち拉丁文法の初步に當り基礎となるべきものである。*os principios* といふも、それを除外したものではあり得ない。

たとひ天正十年前後に一旦出來上つた稿本が文祿三年に開板せられたにしても、その間十年餘り経てゐるので、元の儘ではなかつた筈である。それは版本中の次の事實によつても言へる。天草版本に平家物語を引用すること六例に及び、文語のもあれば口語のもある。その内四例は文語であつて、口語のは接續法の章(二二)^{〔丁表〕}に見える次の二文である。

平家卷一。たとひ關白なりとも清盛があたりをば憚らうすることぢや。
同 卷四。水の底に沈まらせられればとて、亡い人を御覽せられう事は難からうす。

これらの文は一五九二年(文祿)に天草學林で印刷に附せられたハビヤン(Habian)の口譯本に屬する。然らば、この書から引いたのは何時であらうか。ハビヤンの口譯本には、その「讀誦の人に對して書す」といふ自序の終に「時に御出世一五九二デゼンブロ一〇」とあるが、この序文は本文を印刷し始めた時よりも後の筆のやうである。一體、耶蘇會士が國語の體言に接續する助詞に對して持つてゐた見解は、前後全く同じではなかつたのであつて、初には分別して書き、後には體言に續けて書いた。その變遷を一書の中に示してゐるのがこの天草版平家物語である。即ち、その卷第三の終(二一〇頁前後)から變つてゐる。さうしてハビヤンの自序は、その前に收めてある梓行者の總序と共に、後の形式に従ひ、扉及び本文卷一・二・三の分別書きなのと同じくない。乃ち本文の組版後に加へられたものであると見るべであらう。従つてこの自序は本文の組版中又はその後に書かれたのであつて、平家四卷の印刷を了したのも、自序の日附と餘り隔たらないのではないかと思はれる。又、この平家物語は單行本としては存せず、初から伊曾保物語及び金匱集と合綴せられてゐた。總序は三本を合綴して出版するに就いて記したものであつて、「天草においてフェヴェイロの二十三日にこれを書す。時に御出世の年紀一五九三」とあるから、平家物語も世に出たのは一五九三年(文祿二年)の春であると思はれるので、天草版拉丁文典に引用してあるハビヤン口譯本の平家物語は、平家の印刷を終つた時又は公刊を見た時から文祿三年に文典を開版するまでの一年餘の間に加へられたものではなからうか。尤も、ハビヤン口譯本が文祿元年以前に早

く出來て寫本によつて行はれてはゐなかつたか、それを天草版拉丁文典も用ひたのではないといふ事も一應は考へられる。然しながら、ハビヤン自らかの「讀誦の人に對して書す」と題する序文中に、師是に於て予に示し給ふは……かるが故にこの兩條の助けとなるべき日域の書をわが國の文字に寫し梓に鏤めんとす。汝その書を選んでこれを編めと。

と述べてゐるので、「サントスの御作業」などゝは異なり、洋字印刷機將來後に口譯に着手したのであると解せられる。さうすれば、天草版拉丁文典は、印刷するに際して、日本語に關する註解を整へるため、従つて、ハビヤン口譯本は版行前に寫本として行はれたにしても、印刷機の傳へられた一五八〇年(天正十)より遡るものではないと考へてよい。それよりも前、近い頃に口譯せられた平家からも新しい資料を仰いだのであらう。兎に角、日本語を加へたアルヴァーレス拉丁文典は早くから行はれてゐたにせよ、天草版本は刊行前近い頃に完成したのであると解すべきである。或は、天正年間に日本語で説明したといふのも、活用に日本語をあてはめた程度であつて、拉丁語に對照させて日本語の語法を併せ説いた所は、天草版本に於て始めて見られるものが多いのであるかも知れない。

天草版拉丁文典に存する日本語の註解が、イルマシ養方軒バウロに負うてゐるとは、シユールハンマー師の推定せられた所であるが、直ちには從ひ難い。⁽⁶⁾ 寧ろ他にその人を求むべきであらう。一五九二年十一月現在日本副管區内居住耶蘇會士名簿によれば、天草のコレヂオで教師を勤めてゐた日本人イルマ

ンはウンギヨ・ハビヤン (Vnguió Fabiam) と高井コスメ (Tacay Cosme) の二人である。二人とも拉丁語の課程を終つた者に日本語を教へてゐたのであるが、コスメは日本語以外を知らず、ハビヤンは拉丁語をいくらか解したとある。⁽⁷⁾ この Vnguió Fabiam は平家口譯者の Fucan Fabiam と同一人であり、更に又日本に於て入會を許可せられたイルマンの名簿一五八六年^(十四年)^(天正)の條に見える「大阪セミナリオなる五畿内のハビヤン」(Fabião do Goquinay do seminarº de Ozaca)⁽⁸⁾ も別人でないとすれば、新村博士の推定せられたやうに、加賀の禪僧惠俊の改宗したハビヤンなのであらう。かく觀る時、天草版平家物語卷第一(四三頁)に、

其の儀ならば、北面のともがら箭をも一つ射ようずる (iyôzuru)。

と、近畿以東に新しく發生した未來の言ひ方「射よう」の形を用ひてゐるのも容易に理解せられる。翻つて天草版拉丁文典を見れば、存在動詞 Sum の活用に日本語を配した中に、未來形に「ぬようす」(Nyôzu) 「ぬようとか」(Nyôtoqi)「ぬようが」(Nyôga) 等を「であらうず」等と並べ擧げてゐる⁽¹⁰⁾ (一三丁表一)。明かに東國出身者の手に出でてゐる事を物語つてゐて、若しこれが天草版拉丁文典に於て始めて加へられたものであるならば、ハビヤンをその人に擬するのには好都合な條件となる。然しながら、後に述べるが如く拉丁文典に引かれた口譯本平家の文は原文よりも甚しく改悪せられて居り、その他日本語に誤の少くない點から見て、少くとも天草版拉丁文典の日本語に關する記述全部をハビヤンに歸するのは當らないや

うである。

バーデン・フランシスコ・ペシオの一五九四年(文祿三年)九月十六日附書翰には、數年間日本人イルマンに拉丁語を教へてゐたといふ「拉丁語教師の「日本人イルマン」(hó Irmão Japão mestre de latin)の死を報じてゐる。⁽¹¹⁾そのイルマンが誰であるかを明かにし得ないけれども、天草版拉丁文典の編修に關與した一人に數へる事が出來よう。

主として事に當つた者は誰にてもあれ、終始既存の日本文典が最も多く利用せられたに相違ない。

〔註〕

- (1) 大英博物館藏寫本 *Papers relating to the Jesuit mission in Japan.* ADD. MSS. 9860. f. 8R.
- (2) *Cartas de Japão.* (Evora 1598) II. f. 20v.
- (3) アルヘダ文庫藏寫本 *Jesuitas na Asia.* 49—IV—56. f. 92.
- (4) 本書輸出 *Cartas* (Evora 1598) II. f. 126—133 に取ぬられてゐるが、こゝには大英博物館藏原本によつた。ADD. MSS. 9859. f. 5 v.
- (5) 精神科學昭和八年第一卷所載拙稿「吉利支丹と日本語」1—10頁以下。
- (6) 國語・國文第二卷第十一號(昭和七年十一月)所載拙稿「吉利支丹文學者養方・パウロと其の作品」[4]—8頁以下。
- (7) B. M. ADD. MSS. 9860. f. 3R. この名簿は P. Gil da Mata の筆になり P. Alexandre Valignano の自筆證明ある原本であるけれども、日本語の長音記號を全然附してゐなこのや Vnguo ウンギョウか又はウンギヤウか或は又ウンギヨウ・ウンゲウ・ウンゲフの何れであるか不明である。

(8) *Jesuitas na Asia*, 49—IV—56 f. 6R.

(9) 南極廣記所收「天草吉利支丹版の平家物語抜書及其編者」一九八頁以下。

(10) 口語法別記(一一一頁)には、室町時代の「るよつ」の例證として、詠歌之大概(永既序、總塵作、帝國圖書館藏)から次の文が引用してある。

かたじとをかなたこなたによりかけてこなたもかなたもあはひで何に玉のをしてかけてるようぞとの心也。

(11) B.M. ADD. MSS. 9860. f. 3R.

四

長崎版ロドリーグス日本文典がアルヴーレス拉丁文典の範疇なり體裁なりを可なり忠實に守つてゐる事は前述した通りであるが、更に文祿三年天草版本の有する日本語に關する説明とも極めて密接な關係に立つてゐる。以下兩文典の卷一、主として活用篇に於て見られるその關係を明かにしよう。

天草版拉丁文典は、動詞活用篇以外には、名詞の各種の變化にも日本語をあてず、たゞその初に「拉丁語の格に相當する日本語名詞の助辭を伴つた言ひ方」として簡単に示してある(三丁裏)。それは次の如く拉丁語名詞の第二變化を例に取つたものである。

單數

主格 Dominus あるじ、(或は) あるじは、が、の、より。

屬格 Domini あるじの、が。

與格 Domino あるじに、へ。

對格 Dominum あるじを。

呼格 ô Domine あるじ、(或は) 如何にあるじ。

奪格 à Domino あるじより、から、に。

複數

主格 Domini あるじたち、(或は) あるじたちは、が、等。

屬格 Dominorum あるじたちの、が。

與格 Dominis あるじたちに、へ。

對格 Dominos あるじたちを。

呼格 ô Domini あるじたち、(或は) 如何にあるじたち。

奪格 à Dominis あるじたちより、から、に。

これをロドリーグス日本文典卷頭の「實質名詞及び單純代名詞の悉くに通する轉尾」といふ變化表と比較するに、拉丁語を缺く外、對格の「あるじを」「あるじたちを」に「をば、は、が」を増して居り、複數の主格が「あるじ、(或は) あるじたち、しの、ども、ら」となつてゐる點が相違してゐるので、其の他はすべて一致する(一丁表)。

動詞の活用に關しては尙一層多くの共通點が見出される。先づ拉丁文典で、存在動詞 *Sum* に相當する日本語は、

ある、ござる、なる、ゐる、をる、おりある、おぢやる、まします、さうらふ、はんべる、なり、等。
又それに助辭「に」「にて」「で」を加へたものであるとして（丁表）、活用表には、「である、（或は）ゐる」
を代表として擧げてゐる（二二丁裏一）。その條を日本文典に就いて見るに、「をる」が缺けてゐる外は全部
備はり、更に

おはします、ない、おりない、ぢかない、さぶらふ、おう、さうらふ、そろ、わたらせたまふ、いま
そかりけり、ます（即ち、まします）、あらず

を増し、「にて」「で」を伴つた形も新に十二加へてある（三丁表）。活用は丁寧な「でござる」を以て示し
てゐる（五丁裏一）が、活用を法や人稱時稱にあてゝ説いてゐる所は、多少の増減や出入こそあれ、殆ど拉
丁文法の形式を踏襲したものである。

天草版拉丁文典では、規則動詞の第一種活用 *Ano* に「(大切に)思ふ」、第二種活用 *Doceo* に「教の
る」、第三種活用 *Lego* に「讀む」、第四種活用 *Audio* に「聞く」とそれ／＼日本語をあて、活用表を
充してゐる。日本文典では、當時の口語の發音に従ひ、語根（連用形）を指すが、*e*（求め）又は *i*（恥ぢ）に終り、
現在形（終止形）を指す）で *uru*（求むる、恥づる）となる二段活用を第一種活用といひ、語根が *i*（飛び）に終り、

現在形が「u（飛ぶ）」に終る四段活用を第二種活用とよび、波行四段活用は語根が「i（習ひ、思ひ、狂ひ）」に終り、現在形が「o（習ふ）」、「o（思ふ）」、「u（狂ふ）」となるので、第三種活用と稱し、すべて三種に分けてゐる。その分類によつて、拉丁文典に註してある日本語の所屬を定めると、「教ゆる」が第一種、「讀む」と「聞く」が第二種、「思ふ」が第三種なのである。さうしてロドリーグスの文典では、第一種活用に「上ぐる」、第二種活用に「讀む」、第三種活用に「習ふ」を例語として活用を説いてゐる。今その中から、同じく「讀む」をあてゝゐる拉丁文典の第三種活用と日本文典の第二種活用とを取つて、希求法に就いて比較して見ると、次のやうになつてゐる。

拉丁文典(三八丁裏)

日 本 文 典 (二九丁裏)

現在、不

あはれよめかし。
(或は)がな、

完全過去

ようだらうには・ようだらば
よからうものを、

過去完了

ア、よまうするものを、(或
は)ようであつたらばよから

よめかし、(或は)がな、よまいかし、(或は)がな、
よみたい、(或は) ものぢや、よみたいことナウ、
よまうものを、ようであらばよからうものを、よう
だらうにはよからうものを、よみたかつたもの
を、よみたいことであつたものを、よみたかつた
ことぢや、
よまうものを等、
ようであらうものを、ようであつたらばよから

未
來

よめかし、（或は）がな、

よまい
かし、（或は）がな、
ようであれかし、

うものを、
ものを、

日本文典は色々な言ひ方を豊富に示してゐるが、根柢に於ては兩者に相通する所が多い。

五

天草版拉丁文典の「拉丁語の格に相當する日本語名詞の助辭を伴つた言ひ方」の附註に、複數を示す助辭として、「たち」「しゅ」「ども」「ら」の四つを擧げ、名詞を繰返して「人々」「國々」等ともいふ事を説いてゐる（三丁裏）。日本文典に於ても、それと全然同じ順序に「たち」「しゅ」「ども」「ら」を出し、更にそこの助辭の尊卑の程度上の相違を例に就いて詳説し、精密さを加へてゐる。疊語の用例も、拉丁文典の如く、初に「人々」「國々」を置き、それに續けて「寺々」「度々」「様々」「所々」等を増してゐる（三丁裏）。かかる事實は、ロドリーグスの文典が天草版拉丁文典を基としたか、或は又共通の根源が他にあつて、何れもそれに發してゐるかによつて生じたと解せられる。その親子關係にあるか姉妹關係にあるかといふ事は、動詞の活用篇に至つて更に委しく考へる事が出來る。

動詞活用に就いての解説は、兩文典ともに最初の第一種活用の條、即ち拉丁文典の *Amo* 「（大切に）

「思ふ」、日本文典の「上ぐる」の條に見られ、第二種以下は殆ど活用表のみである。日本語動詞としての活用から言へば、「思ふ」は第三種に屬し、「上ぐる」とは同じくないけれども、天草版拉丁文典の「思ふ」の條に於て日本語法に言及した所とロドリーゲス日本文典の「上ぐる」の條の説明引例とは照應してゐる。

天草版本直説法の章に、「思ひ」「読み」「上げ」の連用形を語根と稱し、その用法を説き、

一、名詞となること。

二、「引き裂く」「踏みつくる」の如き複合動詞をつくること。

三、「たい」「はじまり」と複合して、「読みたい」「書きはじめた」と不定法となること。

四、中止的用法に立つこと。

以上の四ヶ條を列舉してゐる(一八)。ロドリーゲスのでは、それに加へるに

五、名詞と複合すること。

の一ヶ條を以てし、複合動詞をつくる例も、天草版本と同じく、「引き裂く」「踏みつくる」にはじまり、更に「読み合する」「書き立つる」「書き集むる」が續き、天草版本にない平家物語の歌・撰集抄の序・實語

歌の句が添へてある(八丁表)。

拉丁文典に、目的分詞の第二種(▼)に相當した言ひ方として、動詞の語根に形容詞「やすい」、容易で

(九丁表)

ある意の「よい」、「がたい」に「くい」を連接したものがあるとて、その例に「書きやすい」「読みやすい」「しにくい」「申しがたい」を出してゐる(二三)。日本文典にも、これと同様な説明を施し同一の用例を收め、たゞ「読みやすい」だけが「読みよい」となつてゐる。かくてこそ各種の用例が揃ふわけである。拉丁文典の據つた親本にも「読みよい」とあつたのであらう。

また庭訓往來正月五日の狀の

抑歲初朝拜者以朔日元三之次可急申之處被駆催人々子日遊之間乍思延引

は分詞の章に引用してあつて、拉丁文典(二五)日本文典(二四)共に、等しく「元三の次を以て」に始まつてゐるもの、各獨立に原典から抄した偶合であるとは言ひ難い。たゞ延引の語を拉丁文典に *yennin* 日本文典に *yenin* と寫してゐるが、これは單に表記上の相違に過ぎない。日葡辭書にもこの語を載録して、*yennin* を標出して「*yennin* と書いてあるやうに發音せられる」と断つてある。かゝる連聲は寧ろ書き表さないのが例であつた。

六

天草版拉丁文典に日本語法に關して註してある條項は、大抵ロドリーゲス日本文典の夫々對應した所に見出され、語例文例の兩者に共通し、而もその記載の順序迄一致したものも少くない事は、前述した通りである。これらの事實のみを以てすれば、ロドリーゲス日本文典は天草版アルヴァーレス拉丁文典を

親本の一つとし、その日本語に就いての記述をとり、更に訂正増補したのであると觀ても差支ないやうである。

然し又互に入り出したり前後したりして、必ずしも相一致しない所もある。例へば天草版本の「不定法に就いて」の章は、不定法のみでなく名詞的中性動詞や目的分詞を一括し、拉丁文法のかゝる言ひ方に當る日本語に就いても説明し、九項目に分けてあるが、その第二項を引けば次のやうになつてゐる。

「師匠弟子を打つは惡むにあらず、能からしめんが爲なり」或は「打つ事は」(1) 又次の様に。「思ふは易い」(2) 「聞くは難し」(3) 「唯今亡びんするをも顧みず」(4) 「夜中のオラショの時分、ともしひのないが信心の爲にはなほよい」(5) 又次の如くに言ふ。「聞くがよい」(6) 「聞いたが悪い」(7) 「參るがましだや」(8) 平家卷一「蟲の聲々怨むるも哀なり」(9) 「かやうに仰せらるゝも」(10) 或は「事を哀なり」(11) 「怨むる事も、謗るも悪い事ぢや」(12) 「眼を開くるも塞ぐもこちのまゝでござる」(13) 平家卷一「子孫の官途龍の雲に昇るよりはなほ速なり」(14) 又次のやうに。「參るよりは參らぬはまし」(15) 「書くよりは書かぬが手上でござる」(16) (二三)(各文例下の番号は私に附す)

日本文典では、接續する助辭によつて十種に分ち、拉丁文典の前項は、その第三・第五・第六・第七に入る。即ち第三は「は」をとるものであつて、拉丁文典の(1) (2) (3) に相當する例を收めてゐる。第五は「より」或は「よりは」或は「よりも」をとるものであつて、(14) (15) (16) に相當する例を出し、

第六は「が」をとるものであつて、(5) (6) (7) と (8) の類例とを收め、第七は「も」をとるものであつて、(11) と (12) の一部と (9) 及び (13) を取つてゐる(二二)。

こゝで特に注意すべきは、日本文典の第五「より」をとるものゝ比較を意味する例に、

子孫の官途も龍の雲に昇るよりは參らぬはました。平家。書くよりは手上でござる、云々。
とある點である。「昇るよりは」と「參らぬは」との間で行が改まり、前文の出典である「平家」をそのままに註してゐて、誤植としては丁寧過ぎるから、こゝに轉錄するに當つて、拉丁文典に引用せられてゐる(14) と (15) とを混合し、(16) の一部を誤脱したものゝやうである。さうして「龍」が拉丁文典に *rebo* とあるのが、日本文典では正しく *rebō*となつてゐるので、日本文典のこゝの引例は天草版拉丁文典から直接出てゐるとのみも言へない。

又、拉丁文典の (9) から (12) に至る間には錯亂がある。(12) の初の「怨むることも」は、(11) と共に (9) の「怨むるも哀なり」の言替へであつて、日本文典に (9) の文に續けて「即ち、怨むることも、或は、事ぞ哀なり」としてあるのが本來の順序であらう。(12) の如く「怨むる事も謗るも」といふ言ひ方は自然でない。日本文典には (10) と (12) の下半とが見られないけれども、拉丁文典のまゝでは共に不完全である。すべて完全した文が示されてゐるものによりながら、拉丁文典に於て混亂を來したのであらう。日本文典は本來の姿を一部分ではあるが忠實に保存してゐると見るべきである。

文例の(1)は童子教の句である。日本文典にはその出典を擧げてゐるのみでなく、本文も師匠の弟子を打つはにぐみにあらず、師の弟子を訓へざるは是を名づけて破戒といふ。

となつてゐる。拉丁文典は「師匠打弟子非惡爲令能」の部分だけを引き、日本文典はその句の終を略して、同じく童子教の句ではあるが、連續してゐない「師不訓弟子是爲破戒」を直ちに續けたものである。而もかく連結した同文が再び卷二「第八の品詞なる格辭の構成に就いて」の章にも見え、それには最後が「破戒とす」となつてゐる(丁裏三七)。此の如き一聯の本文を有する童子教が存してゐて、それに據つたとも考へられないでもない。然し又實語教や童子教は當時の普通教育の教科書として最も廣く親しまれたものであつて、ロドリーゲスも少くともその一部分は習ひ覚えてゐたかと想はれる。故に拉丁文典以外に、かかる本文を引用したものがあつて、それをロドリーゲスが襲用したのではなく、ロドリーゲス自身又はロドリーゲスに智識を提供した日本人の記憶違ひから、かかる文例を作り上げたのであるとも解せられる。ロドリーゲスの文典中には、引用するに本文や出典を誤つてゐるもののが少くない。今は實語教や童子教に關する例を示さう。例へば、童子教の「師匠打弟子非惡爲令能」の句も、卷二「最後の第十の品詞なる助辭に就いて」の章には、「拉丁文典の引例と等しい讀方をして引いてあるが、それには出典を實語教と誤り註してゐる(丁表五)。又不定法の第一「こと」をとる例文に實語教と標してあるものは、友に交つて譯ふ事なかれ、衆に従つて論ずる事なかれ。

といふのである(丁表)。然るに、實語教には上句の「交友莫諍事」しか見えない。下句は恐らく童子教の句から出てゐるであらう。即ち「交衆不雜言」といふ句は、否定形命令法の章に、それに續く二句と共に引き、「衆に交つて雜言せざれ云々」とあり(丁表)、「動詞否定形に就いて」の章には出典を示さないで、「衆に從つて雜言せざれ」と書いてある(丁表)。それが實語教の句に聯想せられて連結し、語句も類推的に變化したのであらうと想はれる。この記憶違ひの連結文は形容動詞(形容詞を指す)の命令法の條にも出てゐる(四丁)。かくして、「師匠打弟子非惡」と「師不訓弟子是爲破戒」とを續けてゐるもの、その初句のみを引用してあるものによつて、記憶のまゝに、誤れるに心づかず書き記したものであらう。故にこの點では、拉丁文典に基づいたのか、それよりも溯つて他の文典に據つたのか、遙には定め難い。

文例の(5)に至ると、日本文典にその出所を明かにして Irmão Paulo と註し、本文の「やうち」が「やちう」となつてゐる。文意から考へて、その語は夜中と解すべきであるが、本より「やちう」と音讀したのが勝つてゐるであらう。

又同じく拉丁文典不定法の章第一項に平家卷一として引用してある

豊前 (Bijen) の守殿今夜闇討にせられ給ふべき由傳へ承る。

の文は、日本文典の不定法第十「よし」「やうに」「たん」「むね」「あ」をとる例の中に見え、

備前 (Bijen) の守殿今夜闇討にせられ給ふべき由傳へ承り候。

となつてゐる(二二)。備前守が正しく、豊前とあるは本より誤であるから、日本文典の文が直接拉丁文典から出てゐるとは言ひ難いであらう。拉丁文典に *Bijen* とあるのは、引用する時か植字する時かに間違つたのであつて、その前の正しい形が日本文典には傳へられてゐると見てよい。「傳へ承る」と「傳へ承り候」と、何れが本來のものであるかは、可なり自由な引き方をしてゐる事とて、容易に定められない。尙前掲(4)の文例も平家物語に屬し、ロドリーゲスはこの文を不定法の章に用ゐないで、卷二「反射代名詞の用法に就いて」の條(五六)、「他動詞に就いて」の章(五六)に擧げてゐるが、共に「滅びんするをも」が「滅びいづるをも」となつてゐる。由る所を異にしたのか、ロドリーゲスの不注意かであらう。

此の如くして、不定法の章に就いて見れば、ロドリーゲス日本文典は天草版拉丁文典と親子關係にあるとして強て解釋せられない事もないが、寧ろ、兩文典は姉妹關係に立つてゐて、ロドリーゲスは拉丁文典の資料となつた既存の文典に迄溯つてゐると見る方が容易に説明出来るやうである。

七

日本語に關する同一の文例を引用しながら、天草版拉丁文典にその出典を示して、ロドリーゲス日本文典に示していない場合は一もなく、反対に、日本文典に出所を記し、拉丁文典に何等註してない場合は往々存する。前に言及したものゝ外に、次のやうな例がある。
いざさらば涙くらべん時鳥われも憂き世に音をのみぞなく

右の歌は命令法（拉丁文典一九丁表）に、

日本文典一三丁裏

あはれたゞ憂き時つるゝ友もがな人のなさけは世にありしほど

菅相丞の歌

ながき世の苦しきことを思へかし假の宿りに何歎くらん

西行の歌

以上二首は希求法（拉丁文典一〇丁表）に引用せられてゐるものであつて、その典據作者は日本文典のみが明記してゐる。いざさらばの歌は平家物語に建禮門院の作として收められ、天草學林版口譯本卷四（四〇）

にも見えてゐるので、ロドリーゲス自ら平家の歌であることを明かにし得たかも知れない。あはれたゞ

の歌は日本文典に尙二ヶ所に引き、一は「古歌」と標して感動詞の條に見え（二六）、一は和歌雜體の例

歌として古今の歌一首及び無常の歌二首と並べ舉げ、古今と共にその出典又は作者等を示してない（二八

裏）。ながき世の歌は詞花集に讀人不知とあり、それを説話化した撰集抄卷一依祇園御詫有男發心事の中

に於ては御詫宣歌となすものであるが、日本文典には撰集抄からの引用を悉く「西行」と標してゐるので、この和歌も撰集抄の歌であるとの意味に於て「西行の歌」と註したのであらう。かく「西行の歌」

としたのはロドリーゲスであるにもせよ、もと撰集抄の歌とでも記してあつたのに據つたのであつて、何等の註記もない拉丁文典のみを見て、ロドリーゲス自身始めて書き加へたのではあるまい。

拉丁語の動詞的中性名詞の第一種（Di）に相當する言ひ方として、動詞の語根に實質名詞「やう」「さま」等を加へるといふ文例を、拉丁文典に示して、

よろづの手あたりの物のいやう (yayō)。

お盃のお廻らせやう。

とのみあり(丁裏)、誤植も含まれてゐるが、日本文典では、その文を整へ出典を掲げて、
よろづの手あたり物の言ひやう、さりとては人ひと一人ひとりちやと心にほむる。客物語。
殊にお盃のお廻らしやうそながし某にました。

どなつてゐる(丁表)。又拉丁文典可能法の章に

御在京のお事どもさぞ色々の事が御座らうず。

客物語。

といふ引用文がある(丁裏)。これが日本文典では、

御在京中のお事どもさぞ色々の事でござらうず、聞きまらしたい。

フム御在國の

間にさうおりあらうず。

客物語。

と、誤つた所もあるが、對話の言葉が備はつてゐる(丁表)。客物語は、日本文典は勿論日葡辭書にも屢引
かれて居り、ロドリーゲスの精讀したものではあつたらうけれども、こゝに日本文典の方が委しいのは、

ロドリーゲスが原本によつて自ら補つたといふよりも、拉丁文典との共同祖本にかく出てゐるのを引いたのであると見るのが穩當であらう。

接續法に關して、

殿の御出家召せばとて、それいかさま心宛もござらうず。そなたの出家は何事ぞ？

なる文を兩文典に引き、拉丁文典には *Morte monog.* (モルテ物語) とし(二二)、日本文典には *Idem* (同前) とある(一八)。日本文典でその前の文はイルマン・ハウロに屬する。恐らく、モルテ物語はイルマン養方軒ハウロの作であつたので、もと書名で示してあるのによつて、ロドリーゲスが日本文典に轉錄する際、丁度直前にその著者のある物語の文を引用して、イルマン・ハウロと記した序を以て同前として置いたのであらう。同じく日本文典許容法の章にこの文を掲げた所には「モルテの物語」と註してゐる(二一)。

不定法の例文に取られた「夜中のオラシヨの時分云々」なる文に、イルマン・ハウロと標したのは日本文典だけであるのも、出典として物語の名が註してあつたのを、ロドリーゲスが改め引いたのではないと想像せられる。日葡辭書は總括的名稱としてすべて「物語」とのみ記してゐるのに、ロドリーゲスの文典では、多くの個々の物語名を擧げ、時に總稱を用ひ、時に又その物語類の著者かと考へられるイルマン・ハウロと標したやうである。⁽¹⁾

〔註〕

(1) 國語・國文第二卷第十二號(昭和七年十二月)所載拙稿「吉利支丹文學者養方ハウロと其の作品」(下)四三頁。

八

然し又、ロドリーグスの日本文典が直接に天草版拉丁文典に據つてゐると認むべき事實も指摘し得るのである。

天草版拉丁文典の *Quanuis* を伴つた接續法に就いて説明した所に、天草版平家の文を引用してゐる事は前にも一言した。即ち、

たとひ關白なりとも清盛があたりをば憚られうする事ぢやに。(天草版本卷一、一五頁)

さればとて水の底に沈ませられたればとて、亡い人を御覽せられうことは難からうず。(卷四、二八二頁)
以上の二文が、拉丁文典では、

たとひ關白なりとも清盛があたりをば憚らうする事ぢや。

水の底に沈ませたればとて、亡い人を御覽せられう事は難からうず。(丁表)

となつてゐる。拉丁文典の *Quanuis* を伴つた接續法といふのは、日本文典に日本語及び葡語に特有なる接續法といふのに當り、拉丁文典に於けるその條の説明引例は、殆どすべて日本文典に取つてあつて、右の平家卷一の文も、

たとひ關白なりとも清盛があたりを憚らうすることぢや。
と出でる(丁表)。兩文典とも「事ぢや」で止め、「憚られう」を「憚らう」と改めてゐる。この文は又日本文典卷二接續詞の條にも見え、「清盛が」の「が」を脱してはゐるけれども、「あたりを憚らうする」

とあるのは同じである（丁表一三六）。日本文典は拉丁文典から孫引し、日本文典卷二のは卷一活用篇のを重ねて用ゐたのであらう。

卷四の文の終が天草版本に *catacarōzu*（かたかろうす）と印刷せられてゐるのは誤植であつて、長音符を誤つたに過ぎない。明かに *rō*（らう）とあるべきなので、文典では何れも正されてゐる。さうして日本文典に於ては、この文を接續法の例文としてではなく、卷一品詞篇の形容動詞の所に用ひて、

水の底に沈まらせらればとて、亡い人を御覧せられうことは難からうす。

とあり（六二）、原本の「さればとて」を省いたのは拉丁文典と同じく、「沈まらせらればとて」も原本よりは拉丁文典の「沈まらせられたればとて」を経てゐると解せられる。拉丁文典に「あたりをば」「どちらせられう」とあるのが、日本文典に「あたりを」「どちらせられう」となつてゐるのは、元來引用するのに比較的自由な態度を持して居り、原文を忠實に文字通りに寫し取つたのでもないからであらう。可能法に就いて拉丁文典に説明した中に、次のやうに述べてゐる。

日本語の現在形は疑問の語を添へて疑問の意味に用ゐられる。Cic. 3 de Orat. Ego te consulem putem? 「そなたを守護代と思はうか」？ 時には疑問の語をふらない。Quint. Lib. 6. Cap. 5. Videas plorosq; ira porcitos: 「あまたの人瞋恚の焰に燃ゆるを見べし」。（丁表一三二）

これは殆ど其の儘に引用せられて、ロドリーゲス日本文典の可能法に關する解説中の一條となつてゐる

(一九丁裏一)。説明の文章が拉丁文典は拉丁文であり日本文典は葡文であることは言ふ迄もないが、日本文典には最初に「直説法の未來形はすべての(可能法の)時稱に通用する」といふ文句が多いのと、拉丁文引例の出典を省略したのと、第一例に葡語譯を加へ、日本語譯の「あなた」を「貴所」としてゐるのが相違するのみである。

更に又天草版拉丁文典の存在動詞の條に、

「であつて」或は「ゐて」の語形は接續法のすべての時稱に用ゐられる。而して助辭「から」「より」「のち」を伴つた接續法が或はそれらを伴はない接續法かによらなければ説明出來ない場合が多い。例へば、「武士になつて朝夕氣遣ひいたす」 *cum miles sim &c.*

「貴所は士さむらいでござつてかやうの事を仰せらるゝか」? *cum sis nobilis &c.*
「身は非人であつて、貴所に合力かふりやくをえ致いたるなんだ」 *cum essem pauper &c.*

「前は少しも病者では無うて、俄に患うて死なれた」 *Cum antea nunquam aegrotus fuisset &c.*

「武士になつて、武士の役に當る事を稽古致いたさうず」 *Cum, I, post quam miles fuero &c.*

とある(一五丁裏一)のと略同意の説明及び引例を、日本文典にも見る事が出来る(四丁表)。日本文典では、引例の拉丁語譯が葡語に改めてあり、引例の前に、

直説法の現在に先行する時は接續法の現在か不完全過去であり、同じく直説法の過去に先行する時は

接續法の過去であり、未來に先行する時は接續法の未來であつて、夫々の場合の例がある。

との説明が挿入せられてゐる。又拉丁文典の初に「であつて」「ゐて」と例語を示してゐるのが、日本文典では「このでござつて、ゐて等」となつてゐる。この事は注目に値する。拉丁文典では前述した如く、拉丁語 *Sunt* の活用を示すのに「である」「ゐる」をあてゝゐるのに、日本文典では「ござる」のみを取つてゐる。それに關聯しての説明であるから、拉丁文典に「であつて」「ゐて」と二つの語形を明示するのが當然であり、日本文典に於てはたゞ「でござつて」のみを擧げれば足る筈である。然るに、日本文典に「でござつて」の外に、活用表中に全然姿を見せてゐない「ゐて」をわざわざ併せ記したのは、拉丁文典に「であつて」「ゐて」とあるのに依據したからである。即ち活用表とその説明との統一を志しながら、原據に索かれて徹底しなかつたのであると考へられる。

九

以上煩を厭はず縷說し來つた所により、ロドリーゲスの長崎學林版日本文典がアルブトレスの拉丁文典にその組織その範疇の大體を則り、名詞動詞の語形變化に關しては、同文典文祿三年天草學林版に日本利用の便宜から添へられた註釋説明を資材として採用し、これを基礎に増訂を加へた點もある事を較明瞭にし得たかと思ふ。又ロドリーゲスが日本文典を編纂するのに参考とした文典は、獨り天草版拉丁文典の一種に限らないで、その日本語に關する部分に於て、親本となつた文典恐らくは日本文典の今

日に傳はらないものにも直接關係を持つてゐるであらうといふ事も、天草版拉丁文典を通じて推定し得るのである。乃ちロドリーゲスの日本文典は、全篇の組立から個々の事象の説明さては材料の蒐集に至るまで、既存の文典から多くの便宜を得深い影響を蒙つてゐるのである。換言すれば、ロドリーゲスの日本文典は四十年來日本耶蘇會士が日本文法を苦心研究した結果を集大成したものである。而もロドリーゲス自身の該博な智識と獨自の見解とを以て特色づけられてゐて、吉利支丹の日本語研究史上に獨特の地位を占むべきものである。

彼自ら文典中に明言してゐるのによつても、重要な點で極めて優れた見識を備へてゐた事が窺ひ知られる。例へば、國語の形容詞は拉丁語葡語等とは甚だ性質を異にしてゐるにも係らず、多くは拉丁語と同一視してゐた。その差異の存する所を明かにして國語の本質に近い取扱をした者は、ロドリーゲスを外にしては見當らない。元來拉丁語では、形容詞の語尾が名詞と同じく性・數・格に應じて變化するので、形容名詞とよび名詞の一體に數へてゐた。故に、南蠻人達は日本語の形容詞が拉丁語の形容詞と意義上相通する所を有するので、日本語の形容詞をも、拉丁語に於けると同様に形容名詞として説いてゐたのである。然しひドリーゲスは、「もろもろの」「あまたの」等の如きもの、み拉丁語の形容詞に相當するのであつて、その他は本來動詞であるとて、形容動詞 (Verbo adjectiuo) 又は形容存在動詞 (Verbo substantiuo adjectiuo) と稱し、不規則動詞の中に入れた。「從來形容名詞として通用してゐたものは動

詞であつて名詞でないといふ事に就いて」を題してその理由を詳述してゐる所によれば、日本語の形容詞は意義上拉丁語の形容名詞と存在動詞とを兼ねてゐて動詞と同じく述語に立つこと、その語尾變化は時稱・法に應じてゐて動詞の活用と異なる事、副詞的修飾語となることも他の動詞の場合と等しい事、日本の歌學書等に「あるらし」の「し」を未來のし、「読みし」の「し」を過去のしと言ふのに對して、「里遠し」の「し」を現在のしと稱して「遠し」を動詞と同列に觀てゐる事などがロドリーゲスの動詞とする所以である（六二丁表）。

要するに、ロドリーゲスの日本文典は、一面にはアルヴートレスの立てた拉丁文法の範疇を遵守し、多くはその型に日本語を當嵌めながら、他面には日本語の特質の存する所を洞察して、拉丁語葡語等とは同じくない點を識別し、又一方には先輩の業蹟を尊重して遺憾なく利用し、その痕跡を直ちに指摘し得る程明白な關係を保つてゐるけれども、他方には博達な智識と卓拔した見解とを發揮して著者の獨創を示せる所は、微に入り細を穿つてゐる。而もかかる二方面が未だ全く純化統一せられてゐるとは認められず、爲に詳細を極めたものではあるけれども、本文典全般にやゝ混亂重複してゐる嫌がないでもない。

然しこの缺陷も慶長年間長崎學林版の大文典に於て觀取せられるのであつて、一六二〇年（元和六年）に支那媽港の耶穌會學林で刊行せられた同著者の簡約日本文典 (*Arte breve da lingua Japones*) に及んでは、拉丁文法の羈絆を全く脱却して當代の文法研究一般の風潮に抜んでゐると言ふのではないけれども、ロ

ドリーゲスの組織立てた日本文法の體系を説き、簡にして要を得てゐる。この意味に於て、長崎版日本大文典は、前人の研究に基づいてロドリーゲス自身の日本語研究が成就するに至る過程を示してゐると言へる。

(昭和八年二月十一日稿)